

一、まれびと

奈良橋 善 司

うかつであった。やっばりはじめに一言断っておこうと思う。はじめ、単に「まれびと」について、と聞いた。書く段になって「再検討」という但し書きがあるのだという。この違いはぼくにとつて岩より重い。実際、この課題を引き受けてしまったのは、ぼくの不注意というほかはない。なぜなら次のような理由で、ぼくは、この場合の解答者として適性を欠いているのではないか。そんなふうに思われてならないからである。

と
ま
れ
び
と
それというのは、まず問題の性質上、やはりどうしても欠くことのできない日本宗教史の知識および、その現状について、ぼくもまたご多分にもれず——というのは、今日の古代学一般に意外と目立つということだが——きわめて不案内であること。次に、いわゆる折口学への興味のかたち、とりわけ、この場合重要であろう古代学の現在と折口学というような方向に対して、ぼくは今日かなり無頓着になっていること、というよりかなり以前から、ぼくの興味は釈迦空折口信夫へという方向に、むしろ深刻に傾いているといえ、あるいは判ってもらえるかもしれない。そして、さらに不運なこと——とでもいっておこうか、それが折口という他者の論理であることを熟知しながら、かつ昨今さまざまな折口に対する批判反論の類に出合いながらも、今のところ「影響」ということばが、これほど自然に、それゆえに辛辣なかたちでぼくと係っている他者は存在

しないということである。それでもなお「まれびと」、すなわち折口の他界および、その住者について、強いて「影響」への反抗の記憶のようなものを掘りおこしてみるならば、かつてそれは、ぼくのなかで柳田国男の他界論と対比的に共存したこと。またベルグソンその他、二、三のヨーロッパの学者の論理的扮装を通じて、きわめて個人的実験的な密室の試みとして、その、ぼくでないぼくのなかの住人の姿を、ぼくの外側に写し出してみようとした過去が、もはや思い出ともいえないような根拠となつて残つてはいるけれど、それが一体何であつたか今だに判然としないばかりか、結局、手もなく彼の住人をぼくのなかに住ませたまま、なお抗すべき、どんな他界もぼくは観じていないのである。

だから以下に述べるのは、ほんの感想にすぎない。しかも懐古的、かつパセテックなものすら帯びてくる気配さえする。だが、それ以外の方法で書くとするれば、今のところ、ぼくにとつて嘘になる。

今度、折口の晩年の数篇を読み返えしてみた。だいたい昭和二十五、六年から、彼が亡くなった二十八年にかけて書かれた他界論なものは、その講演記録であるが、どれもこれもぼく自身の苦戦の過去も、そこに染みついていてるようで、なつかしかった。

そのなかの一篇で、彼の最後の論文となつた「民族史観における

他界観念」(全集20)は、「永遠の信仰」という項目ではじまる。そういえば、ぼくは、この「永遠の信仰」ということばに、どれほど振り回されてきたことか。他界の問題に限つていえば、ぼくと折口——正確には折口全集との付合いは、つまるところ、この「永遠の信仰」への反問であったといつていい。そして今、ぼくが書こうとしているのも、結局、その過ぎ去り、かつなお漂っている「反問」の時間なのだと思う。

此は、日本古代人の持つてゐた、他界観念研究ののうとである。何よりも前に言つておくことは、他界の用語例を、あまり自由に使ひたくない。さうしないことには、古代における此観念が、非常にひろがつてしまふ虞れがある。

古典古語と民俗とを主要な資料として、そこに影のように従つてきた日本古代の他界観念を、でき得るかぎり原型に近いかたちで掬い取ろうとする者にとつて、不要な資料の対比、分析、抽象操作は、時に、採るべき実質を漏らして空疎な観念遊戯に陥ることを折口は虞れているのだから。ともかく、こう前書きして彼は、大正のはじめから執拗に追いつけてきた他界と、その住者について、資料の限界ぎりぎりの生の印象を次のように概括する。

我々生類^{シヤウルキ}の住んでゐる世界から、相應の距離があり、人間世界と、可なり隔つてゐるが、そこまでは、全く行った人もなく、出向いて来た生類もなかつた訣ではなかつた。さう言ふ地域である。其ばかりか、彼方から、時を定めて稀々ながら来る者があり、間々ひよつくり、思ひがけない頃に、渡つて来ることもある。此偶然渡来するといふ形の方が寧ろ、普通の形式のやうに思

はれてゐたほど、さう言ふ考へ方が普通になつて来たのである。何の為に渡来するのか、その目的を忘れてしまつたよりも、だからもう一つ古い姿のあつたことを考へてよい。

「もう一つの古い姿」——折口の考えでは、その訪来者は、元来、人間に災する小さな神々、精霊たちを屈服するために他界から訪れるものであつた。そしてそれが、すなわち折口の、いわば原型としての「まれびと」であることは、おそらく周知のことだろう。

しかし、その訪来本来の目的を忘却する日が、やがてやってくる。さらに訪来自体の記憶すら原型を離れ、さまざまに変貌し記録されるようになった。一方、民俗として伝承されたものも、仏教や道教など、新来の神々の生活と融合した。その前者の一例を折口は、また次のように概括している。

我々の持つた類型の中、浦島式のもの、純な民間説話のやうに、宮廷記録家から扱はれたので、すっかり歴史的印象を失つてしまつてゐるやうに見える。だがこれが、宮廷説話の様な外貌をとると、ひこほ^{ヒコホ}でみ尊説話のやうに、前後に歴史解釈が附加せられて来る。此類の説話には、恋愛要素が、相應に重要な部分になつてゐる。浦島式説話から之を除くことは、却て容易で、それが、自然でさへある様に感じる。歴史印象を抜くことの容易でなく見える「たちまもり」式のになると、出石人の宮廷大喪に奉仕した慣例の伝承が重なつて、恋愛部分など消えてゐる。

ぼくは今、折口の論文「民族史観における他界観念」の最初の項目「永遠の信仰」を通じ、必要と思われる一部をぼくの文脈のなかに引きながら、今度の課題に答えるべく問題点を概括しているつも

りなのだが、こうしているうちにも、ほくのなかに浮んでくる反問のようなものは、あの十数年前と、おそらく同じものであろうという気持を、どうすることもできないのである。

かつて人々は、他界を何処に思い見たのだろうか。折口の他界は、海彼岸とそれに続く大空、そして人界と地境に住む小さな神々——精霊たちの在り処と、だいたい二つになるけれど、はたしてこれを、そのまま日本古代の他界とみてよいかどうか。しかしぼくの考えは、ほとんど十数年前の通りに反問にもならぬまま、そこで終止してしまう。

と
び
れ
ま
一
側にも大いが必要がありそうである。

そういえば、折口の他界という、ただちに海彼岸の他界ばかりのようにいる人も、依然として十数年前と変わっていないようである。そして、この種の誤解、ないし誤読は、いわゆる「まれびと」に典型を見る他界者の問題を含め、その肯否の別を問わず、かなり目に付くことを思うと、再検討は、存外読者であるぼくらの一側にも大いが必要がありそうである。

昨年、『文学』（昭43）に発表され、折口の他界論批判としては貴重な鈴木満男氏の「マレビトの構造」（昭49・同名著書に収録）は、先ごろ益田勝美氏によって反論を被った（『講座・古代学』所収・「古代の想像力」昭50）。紙幅の関係上、詳細な紹介はできかねるが、益田氏が鈴木氏に反論している一つは、それこそ折口の論文の読み取り自体の問題であり、もう一つは、やはりそれと無関係ではないが、折口の常世の国発見事情に関して——大正十年、折口が沖繩に渡る以前の、いわば前他界論ともいうべき「異郷意識の進展」（大正五年）「妣が国 常世へ」（大正九年）というような論

文を沖繩旅行と、どういう係りの上で受け取るかという点である。たしかに益田氏が指摘する通り、鈴木氏の折口論文の読み取りは、いかにも図式的、短絡的で結論を急ぎすぎた欠陥は否みがたいと思う。しかし一方、鈴木氏が、折口の「マレビト論」は沖繩旅行以前の古典研究のうちに「形をなし」たと見る点に、益田氏が「無理押しだ」と反対しているのはどうかと思う。「形をなし……」という表現の拙さ、そしてその理由づけの性急さにこだわりさえしなければ、氏の推論もあながち無理とはいえないと思う。というのは、鈴木氏に反対した益田氏の常世の国発見事情についての推論は、たしかに手硬いものだけれど、一方、氏は（鈴木氏も同様だが）折口の他界に関する最初の論文、あの「異郷意識」に関する論文と共に、前他界論として把握すべき「髯籠の話」（大正四年）、その他数篇が、そこでは考察の外に置かれていて、その点を加味して考えると、鈴木氏の推論ももう少し説得力を持つものになると思うからである。

もう手持ちの紙幅も尽きかけた。最後に益田氏が、同じ「古代の想像力」の終りに附記のかたちで述べている常世神についての氏の見解を引き、若干の感想を加えて小論を閉じようと思う。

氏は「柳田、折口両先生と違うことになるかもしれない」と断つて、次のようにいう。

両先生のように、常世の神の訪来を来る年ごとと考え、それぞれ共同体の守り神の季節ごとの来訪と同一視しておられる点を、そう見ることはならず、それぞれの共同体が祀っている土着の神に対して、常世の神は、その血縁的、地縁的範囲を超えて、非周期的にやってくるもので、こちらが切実に必要な感

じて、共同体の祖神ミコのほかにもその神を思い崇めている、という二重構造になりそうな予感を抱いております。

講演記録であるので、氏の意は、いい尽されていないかもしれない。しかし、ここで特徴的なのは、やはり常世神と祖神を区別し、それぞれ臨時の神、定期の神として崇めていたという信仰の二重構造という点だろう。だが、この考えは、結局、折口の他界観のうちに取りつてしまうのではないか。益田氏の他界の全貌は、思いみがたいたが、しかし「異説」というほどでもあるまい、とそんなふうにはくは思われてならないのである。

二、祝詞と宣命

折口信夫の祝詞、宣命についてのかんがえは、折口の文学発生論の根本にかかわるものとしてよい。さまざまの論文に書かれているものをまとめてみると、だいたい次のように略述することができると。すなわち折口はまず常世の国からもたらされた神のことばである祝詞を最古の姿のノリトとして最初に置き、その祝詞を受ける側の和するヨゴトが次にできてくるとかんがえる。そしてそのノリトは神の代役としての御言持ミコトモである天皇が下していたが、後にやはり代役の思想で、中臣がもっぱら唱えるようになり、上から下への型が変化していき、下から上へのヨゴトやイワイゴトと同じになり、それらをも含めてノリトというようになり、奈良時代には現在延喜式にみられるような姿の祝詞、宣命が成立したということになる。

折口は、他界者の原型として、訪来者とともに、それこそ二重・三重の構造として既存者、そして精霊を想定している。そして訪来者がイコール祖神と考えられるようになるのを新しい変化と見ている。つまり原型としての他界観念と祖裔観念との結び付きが、宮廷、民間を問わず古代信仰を大きく変化させたと見ているわけだが、そういう折口の古代信仰史ともいうべき流れのなかでは、益田氏の考えも、その流れの一面面とみて少しも矛盾しない。そんなふうには見えないのである。ぼくの叙述は、結局、この一文のはじめに、やはり戻ってしまったようである。

古 橋 信 孝

したがって本来的な意味でのノリトはむしろ宣命が伝えているということになる。このような過程のなかでの重要な指摘は、最古のノリトは叙事詩だということであり、またノリトには「地」の部分と「詞」の部分があり、その「詞」の部分副演者の身ぶりから科白を発生させ、呪言のなかに真に重要な部分として劇的な舞踊者の発する短い詞章が考えられるようになり、抒情的色彩が濃くなっている、「地」の文から分離してうたわれるようになっていった、というように論じられていく（主に『国文学の発生 第四稿』）歌の発生に対する考え方、および叙事詩に対する考え方であるが、その興味深い問題はあたえられたテーマから逸脱していきそうなので、ノリトに焦点を合せてかんがえていくことにする。